チベット密教における死者浄化儀礼とその意義

高　松　宏　寶
（クンチョック・シタル）

はじめに

密教の実践的儀礼は人々の生と死に大きな利益をもたらし、強い影響を与えるものである。その実践法は、生前だけではなく、死後においても、その人に対して大きな役割を果たし、恩恵をもたらすものでもある。死者を見送る適切な方法と宗教儀礼は仏教典籍に多く説かれており、伝統的に多くの文献が伝えられている。そのような理由から、仏教経典の中には死者のための儀礼や、死者に授けるべき教えなども数多く説かれている。そこで、筆者は智山伝法院の総合研究テーマ「伝統の創造　―真言密教の実践的展開―」のうち、宗教儀礼研究テーマを取り上げ、チベット密教における死者の浄化儀礼とその意義について論じたい。

死者浄化儀礼の代表的な経典に、死者を直接の対象として釈尊が説かれたと言われる『一切悪趣清浄タントラ（Sarvadurgatipariśodhana Tantra）』があり、それに基づいた儀礼に関する文献が多くある。サンスクリット文献とインド後期密教における宗教儀礼について、我が国では桜井宗信博士、種村隆元博士、森雅秀博士などによる多くの研究成果がある。また、桜井博士は『一切悪趣清浄タントラ』に関するいくつかの研究成果(1)を紹介している。

一方、チベット密教文献に基づいた死者のための浄化儀礼に関しては、現代の研究者による研究成果は少ない。チベットの学僧たちは葬儀や死者への引導、死者浄化に関する儀礼について非常に多くの著作を残して

いる。それらは密教によって死者を安らかに良い他界へ送り届けるという内容である。死者の再生先は善悪の業によって決定されるという前提の上で、死者の意識が混乱せずに良い来世に転生できるように、また死者を浄土や仏国土に導くために、さまざまな密教儀礼や方法が伝えられている。

日本仏教の伝統においても葬儀に関する長い伝統としっかり定着した儀礼体系が実践されていることは周知の通りである。

筆者は以前、チベット仏教による葬儀の実際とその意義について述べ(『現代密教』第29号「チベットの葬儀とその伝統文化について」)、そこで死者の浄化儀礼(gshin po sbyang chog)について短く取り上げた。ここでは、主にはmanualとして、その内容について詳しく説明し、チベット密教文献に基づいて短い論考を試みたい。

死者のための浄化儀礼の主な目的は、死者の意識をうまく導き、善い転生に向かわせることである。そのため、死者の罪や業障を浄化し、功徳を積集させることが重要となる。

死者浄化儀礼に関する主な経典は、『一切悪趣清浄タントラ』『真実摂経(Tattvasaṃgraha Tantra)』とそれらの解釈をはじめとしていくつかある。また『秘密集会タントラ(Guhyasamāja)』『時輪タントラ(Kālachakra)』『金剛帳タントラ(Vajrapañjara Tantra)』などにもそのような浄化儀礼が説かれている[(2)]。

チベット密教ではさまざまな本尊に基づいた死者浄化儀礼が実践されており、本尊としては、薬師如来、普明大日如来(kun rig rnam par snang mdzad)、阿閦如来(不動如来、mi khrugs pa)、金剛怖畏、金剛薩埵などがあり、それぞれの独自の曼荼羅と行法がある。

今回は、チャハル・ロサン・ツルティム(1740-1810)『世尊普明(大日)による浄化儀礼法(= KRBC)』[(3)]、ヨンジン・イェシェ・ギャルツェン(1713-1793)『浄化儀礼法の実践と典拠(= BCLKh)』に基づいて、さらに参考テキストとしてワルマン・クンチョック・ギャルツェン

(1764-1853)『死者浄化儀礼（= ShBC)』を用いて、普明大日を本尊とする曼荼羅による伝統的な浄化儀礼について考察していく。なお、論文内の和訳は大意であり、厳密な翻訳ではないことをお断りしたい。

本論

一般に密教儀礼は加行・本行・結行の３つから成り立っている。普明大日の浄化儀礼もその例に漏れない。個人の行者や阿闍梨が儀礼を行う時は、普明大日如来の絵画の曼荼羅などを安置し、我生起、前方生起、瓶生起、曼荼羅入壇を行うのが一般的である。少なくとも我生起と前方生起は必ず修し、故人のための浄化儀礼式を行うことである。

１．儀礼の加行について

南門の浄化儀礼もまた加行・本行・結行から成る。加行には①準備行、②瓶生起、③依代（よりしろ）の生起の３つがある。

①加行の第一、準備行について

以下の通り、南門の浄化儀礼の準備を行う。

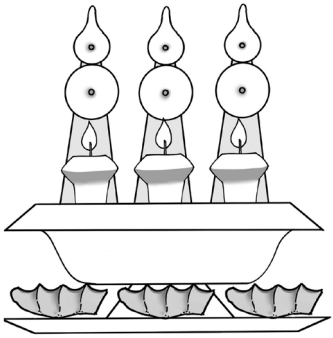
（１）浄化台（sbyang stegs）を作る。曼荼羅の南側に四角い台を設け、その上面に五浄（牛乳、ヨーグルト、ギー、牛糞、牛尿）と白檀を塗り込め、白い八葉蓮華輪を描く。名前の浄化（ming byang）ではこの八葉蓮華輪の上に紙に書かれた名前を安置することになる。

供えられた供物と曼荼羅

（２）浄化の依代（byang rten）を用意する。依代は遺体あるいは故人の衣服、帽子などであるが、それらを用意できない場合は形代

（かたしろ）を準備する。形代は布や紙に描いた故人の絵あるいは人形で、合掌し蓮華座で座り、両手の間に蓮華を持つ姿で描き造形する。形代の胸には故人の名前の第一文字に空点（thig le/bindu）を付けた文字を描いておく。例えば、ཟླ་བཟང（blo bzang）という名前の場合、第一文字　ཨ（ba）に空点をつけ、ཨཾ（baṃ）となる。

（３）トルマ供養（バリ供養、mchod gtor）のための供え物を用意する。これは忿怒尊のお払いのトルマ儀式（bgegs gtor）で用いる供え物であり、小さなトルマ（gtor lcog）３つ、小さな灯明（ting lo）３つ、小さな団子（chang bu）３つを器に並べ整えたものである。



奥から小さなトルマ、小さな灯明、小さな団子

（４）安息香（gu gul）、白芥子、香炉、金剛ダーキニー護摩の供養を用意する。

（５）黒芥子とお払いの土砂と白芥子を用意する。

（６）沐浴儀礼の道具（クシャ草、閼伽水など）を準備する[(4)]。

②加行の第二、瓶生起について

瓶生起では、沐浴儀軌の瓶を成就する。阿闍梨の前方にクシャ草を置き、その上に儀礼のための瓶を安置し、瓶の中に閼伽水を満たす。浄めるために金剛夜叉明王の真言（oṃ vajra yakśa）を唱え、さらに浄化の真言（oṃ sarva svabhāva śuddha sarva dharma svabhāva śuddhoh ‘haṃ）によって空にし、その空の状態からpaṃ字が生じ、それが白い宝瓶に変容したと観想して、生起する。

儀礼のための瓶の中の水はガンジス河の水と不二であると考える。その水の上に月輪、その上にoṃ字があり、その周りを本尊の真言鬘が囲んでおり、真言鬘から光明が放たれる。その光明によって十方の一切仏の身口意の加持力と威力すべてを白い甘露の光としてお招きし、oṃ字

などに溶け込む。そこから智の甘露が流れ出し、瓶の水と一体となったと観想する。これによって瓶水は浄化される。根本真言を21回唱えるなどする。後に閼伽水の成就を行うことになる[5]。

③加行の第三、依代の生起について

依代を浄水によって浄化し、金剛夜叉明王の真言によって浄め、浄化の真言によって空にすることで、依代は浄化されて空となり、消え、無所縁になり、見えなくなる。その空の状態から死者の名前の第一文字が空点の付いた状態で完成する。死者の姿である五蘊・十二処などが完成した、などと唱える。

続いて、本尊らに供養し、故人の意識を呼び寄せて、依代に入らせる。金剛縛印と金剛夜叉明王真言と、oṃ vajra sattva hūṃ を唱えて、「根本ラマと相承のラマの真実のことばと、仏法僧三宝の真実と、如来・金剛・宝・蓮華・羯磨の五部族すべてと、心真言と印相と真言と明咒の諸尊と、特に悪趣清浄タントラの本尊普明大日と眷属諸尊の真実によって加持された」と観想し、故人の名前を呼びながら「ここに入り、留まりなさい」と命じる[6]。

ここでは、故人に自分が死んだことを理解させることが大切である。故人に対して中有（bar do）にいることを言い聞かせる。死の直後の段階では、死者は自分が死んだのかどうかわからず、非常に混乱している。そのため、「あなたは死亡し、いま中有にいる。中有では現象は生前とは異なる。心配せずに、心を安らかにしなさい」[7]と言い聞かせる。その際には阿闍梨は故人が自分の目の前にいると強く信解（観想）することが非常に重要である。

阿闍梨は故人に対して中有について次のように説く。

「この世からあの世に行く死者よ、聞きなさい。あなたは死亡し、以前の身体を離れた。次の身体を得るまでの間、中有にいるのだ。いま見えているすべては、生前の現われとは全く異なるので、わかるはずだ。いまは怖れと恐怖と不安などが現れてくる。それはあなたが中有にいる証

拠だ。地の風が溶け込み、転変するとき、巨大な山が崩れ落ち、自分が地中にいるような轟音を聞き、巨大な落石に押しつぶされたと感じる。水の風が溶け込む時、大海が荒れ狂うような轟音を聞き、ひどい恐怖を感じる。火の風が溶け込む時、巨大な炎の輝きが見えて、劫火が現われたように感じ、炎が燃え盛り、焼け落ちる轟音を聞き、耳と心臓が裂けるような恐怖を感じる。風の風が溶け込む時、劫風に吹き飛ばされたように感じ、ひどい恐怖を感じる。それはあなたが中有にいる証拠である。また、恐怖あるいは歓喜の感情が突然生じる。刹那ごとに、知っている人々や見知らぬ人々が現われ、害や利益を与えてくる。それらすべても中有にいる証拠である。」(8)

以上は、仏教に説かれる死と生の間の時期である中有のことを詳しく説明して認識させることを重視して、説かれている。内容については、中有の概要について阿闍梨ヴァスバンドゥが『阿毘達磨倶舎論』などに詳しく説明されている通りである。

また、阿闍梨は次のように故人に言い聞かせる。

「要約すれば、どのような怖れや恐怖や不安が現われても、それはあなたの心が乱れたせいであり、実際には塵ほども存在していない。夢の中で、火に焼かれ、水に流され、悪人に殺されても、恐れる必要はない。生前の身内や友人、財産や所有物などすべてを、いまあなたはあきらめなければならない。あなたはこの世を去ったのだから、すべてを夢・幻と見て、何にも執着すべきではない。もし、身内や財産などに執着したならば、閻魔や悪趣の怖れから解放されることはない。中有にいるあなたには、いま頼れるものは何もない。唯一の救世者は欺くことのない三宝であり、本尊普明大日とその曼荼羅である。だから、曼荼羅と本尊を信じ、供養し、目の前にいなさい。悪趣におけるカルマから救済してください、清らかな浄土に導いてくださいと、心から強く祈願しなさい。」(9)

これはダライ・ラマ８世の師匠であるヨンジン・イェシェ・ギャルツェンが自身の体験から述べたことばである。

なお、ここで再び依代を浄化するために、身口意の三処または二十二処[10]に触れて浄化する方法もある。このときに死者を本尊として生起する伝統と本尊として観想しない伝統がある。

２．儀礼の本行について

本行には、①障碍の浄化（bgegs sbyang）、②罪障の浄化（sdig sgrib）の２つがある。

①本行の第一、障碍の浄化について

密教の行には障碍や邪魔を浄化する儀礼が必ずある。ここでも同様で、死者に関わる密教儀礼にはさまざまな障りがあり得るので、それらをなくすために障碍の浄化を行う必要がある。

阿闍梨自身が刹那に忿怒形の降三世明王となり、忿怒の供養を金剛夜叉明王真言で浄め、次にānayaという真言によって威光を生起し、浄化の真言によって空の状態にして浄化する。

次に、BCLKhによれば、障碍を払うための力として、曼荼羅と阿闍梨自身の行の主尊など無数の忿怒尊をお招きすると唱えながら、自身の胸のhūṃ字から光を放ち、金剛夜叉明王などの十忿怒尊と護法尊諸尊を招いたと観想する。

金剛縛印をなし、oṃ vajra mahā krodha rāja sapari wāra vajra sama jah と真言を唱え、

「hūṃ字から生じた智慧の劫火のように燃え盛る炎によって無知と貪欲の暗闇の世界を焼き尽くし、瞋恚閻魔（zhe sdang gshin rje）の畏れ一切を消除し、勇気のしるしである虎皮を持つ大勇者と呼ばれる明王たる忿怒尊よ、ここにお座りになってください。衆生のために、供養を受け取って、ここに留まってください」[11]と唱える。これによって無数の忿怒明王らを招いた、と観想する。

六供養（華、焼香、塗香、灯明、飲食、奏楽）を供養する。

称讃として、「hūṃ、法性と空が不二であるその状態のままで、世間

の行いのあり方も捨てることなく、怖畏（’jigs byed）のお姿を示される御方、大忿怒の燃え盛る集まりに礼拝いたします」[12]などを唱える。一般に密教儀礼では供養、称讃、加持が必ずある。障碍の敵に対して礼拝と称賛を行う。

次に、事前に準備したトルマ供養の供え物を加持する。金剛夜叉明王真言で浄め、浄化の真言によって空にし、その空の状態からoṃ字が生じ、そこから広大なる宝の器が生じる。その器の上に色声香味触の五妙欲の円満なる功徳をトルマとして観想し、oṃ āḥ hūṃを3回唱えて加持する。

続いて、BCLKhによれば、障碍を呼び寄せる。阿闍梨自身の胸のhūṃ字から光が放たれ、対象である故人の罪障浄化を妨げる諸々の障碍の集まりを浄化したと観想する。曼荼羅の南門側の守護輪の外側に、魔や霊的なものなどの障碍がさまざまな姿で座っていると観想する。阿闍梨は左手で金剛鈴を鳴らし、右手で施勝印をなしてトルマ供養の器を持ち、器を右回りに回して、真言を３回唱えて、障碍となる魔や霊的なものたちに食べものとして与えると、彼らは満足したと観想する[13]。

oṃ sumbani sumbani hūṃ / gṛhṇa gṛhṇa hūṃ / gṛhṇāpaya gṛhṇāpaya hūṃ / ānayaho bhagavan vajra hūṃ phaṭと３回唱える。

チベット仏教の伝統では、小さなトルマは客人の食事、小さな団子は旅の食糧、小さな灯明は旅路を照らす灯りである。灯明の光によって魔たちは諸々の仏国土を目にし、仏国土に行きたいと願うようになる。

そして、BCLKhによれば、払うために魔たちに命じる。

「hūṃ 大曼荼羅に住する天などのすべての障碍の集まりよ、聞きなさい。私はここで浄化儀礼を行う。あなたたちはここを離れて、他の場所に行きなさい。もし、従わないならば、燃える智の五鈷杵によってあなたたちの頭を打ち砕く。」[14]

真実を述べて、払うことは、BCLKhには以下の通りである。

「根本ラマと相承のラマの命令は真実である。仏の真実、法の真実、僧の真実、如来・金剛・法・蓮華・羯磨の五部族の一切諸尊の真実、心真言、印相、マントラ、明咒の尊格たち、特に世尊たる悪趣清浄タントラ

の法の王である普明大日と眷属諸尊の真実と、真実の加持力によって、故人に対して生前に害を与えた者たちよ、死後にどこにおいても身体と命と善い転生を得ることを妨げるすべての障碍となる者たちよ、また遺族などを欺き害なす夜叉などすべての者たちよ、トルマ供養によって満足しなさい。害をなそうなどという悪い考えすべてを捨てて、利他と菩提心を持ち、自分の場所に戻りなさい」(15)と命令する。

再度、oṃ sumbani sumbani･･･という真言を降伏的に強く唱え、依代に対して安息香を散じ、白芥子を散じ、金剛鈴を強く振り鳴らして奏楽をなし、トルマ供養を右回りに回して与える。さらにトルマ供養を道場や御堂の外に運び去り、捨て置く。これらは阿闍梨の禅定の力と、真言の威力、成就の材（供物）の力によって、目的を果たすことができると考えられている。このような儀礼はチベット仏教の伝統では通常に行なわれているものである。

②本行の第二、罪障の浄化について

このような浄化儀礼の主な目的は、死者の罪障や業障、さまざまな汚れを浄化することによって、死者の意識を浄化し、六道のより高位の世界あるいは仏国土に導くためである。

そのため、罪障と業障、煩悩などの浄化のために、以下の五種の浄化儀軌を行う。❶護摩、❷お払いと陀羅尼、❸沐浴、❹灌頂、❺転移儀軌（spor chog）である。

❶罪障浄化の第一、護摩による罪障浄化について

護摩による死者浄化儀礼はチベット仏教ではしばしば行われる。葬儀では護摩が単独で修法されることも多い。ここでは金剛ダーキニーの護摩に基づく儀礼について紹介する。

事前に護摩炉または白い円形の香炉と、その前に並べ整えた金剛ダーキニーの供養と、鏡と黒芥子の入った銅器を準備し、安置しておく。羯磨瓶の水とoṃ vajra yakśaという真言と浄化の真言によって空にし、そ

の空の状態から息災の護摩炉が生起したと明らかに観想する。金剛ダーキニーへの供養も同様に羯磨瓶の水とoṃ vajra ḍakaという真言と浄化の真言（svabhava śuddhoh）によって空にし、浄化する。このように供養し、称讃した後に、儀礼を始める。

普明大日のある儀軌には、次のように説かれている。

「空の状態からhūṃ字が生じ、そこから息災の護摩炉が生じる。この炉は白く円形で開口部の広い形状であり、金剛鬘によって囲まれている。その中に、jahをraṃ字が飾り、完全になったところから智慧の炎が燃え上がる。その中心にpaṃ字から蓮華、raṃ字から日輪、hūṃ字から金剛が生じ、金剛はhūṃ字で飾られている。金剛ダーキニーのお姿は、身色は黒、一面二臂で、御胸はhūṃ字で飾られ、印相をなして金剛杵と金剛鈴をお持ちである。御足は右足を伸ばしており、その頭頂にoṃ字、のどにāḥ字、胸にhūṃ字がある。jah hūṃ vam hohという真言によって胸のhūṃ字から光が放たれ、智薩埵をお招きし、溶け込み、一体となる。oṃ vajra ḍaki argamなどと唱えて供養して、「阿閦金剛の智慧は偉大である。金剛界は大賢者。三金剛の最勝なる三曼荼羅。金剛ダーキニーに礼拝し、称讃します」と唱える。」(16)

この行法は『金剛ダーキニータントラ』にも説かれている。また、死者の罪障浄化に黒芥子を用いることは『悪趣清浄タントラ』と『真実摂経』にも示されている。

さらに、「故人の両足裏に風輪が生じ、風輪の中心に智慧の炎が現われる。故人の胸には黒いpaṃ字がある。これは故人の身口意の罪障一切が収斂した悪業の種字であって、智慧の炎の光によって故人の鼻の穴からこのpaṃ字が引き出され、この種字はさそりの姿となり、黒芥子に溶け込む。一切の罪障は黒芥子に溶け込んだ。」と、阿闍梨は観想するのである(17)。

また、別の儀軌には、真言を唱える際に故人の名前を呼ぶという方法もあると説かれており、彼（女）の名前を呼びながら、阿闍梨が１億回

あるいは10万回真言を唱えて護摩を修すれば、地獄に落ちる罪も解放できる、と記されている。

以上が普明大日の儀軌による護摩法である。

❷罪障浄化の第二、お払いと陀羅尼による回遮について

罪障を駆逐し、追い払う回遮によって浄化する。密教の真言、陀羅尼はさまざまな尊格や目的のために説かれており、唱えることで加持する手段でもある。私たちのさまざまな悪業や罪障を浄化する重要な機能を持つと信じられている。

タントラに説かれる五大陀羅尼（gzungs sde lnga）を土砂と白芥子に対して唱えて加持し、さらに、十五種類の真言[18]を唱えながら、加持された土砂などを浄化対象である依代すなわち遺体などに散じるやり方である。

五大陀羅尼とは、普明大日陀羅尼（悪趣清浄の根本陀羅尼）と、勝者阿閦陀羅尼（業障浄化の陀羅尼）、仏頂尊勝仏母陀羅尼（Uṣṇīṣa vijayā）、仏頂無垢光陀羅尼、パドマウシュニーシャ陀羅尼である。これらに加えて、金剛怖畏真言、金剛薩埵百字真言、薬師如来真言などを唱える場合もある。

五大陀羅尼

〈１〉普明大日陀羅尼

oṃ namo bhagavate / sarva durgate pari śodhani rajaya / tathāgataya / arhate samyaksam buddhaya / tadyathā / oṃ śodhani / śodhani / sarva pāpam viśodhani / śuddhe viśuddhe / sarva karma avaraṇa viśodhani śuddhe svahā（Pek.ta.106a1）

〈２〉勝者阿閦陀羅尼

oṃ namo ratna trayana / oṃ kamkani kamkani / rocani rocani /trotani trotani /

ṭrāsani ṭrāsani / pratihana pratihana / sarva karma param para ṇi me sarva sattva nanca svahā /（D.ta114b6;Pek.ta114b4-5）

〈３〉仏頂尊勝仏母陀羅尼（Uṣṇīṣa vijayā）
oṃ bhruṃ svahā / oṃ amṛita ayur da de svahā

〈４〉仏頂無垢光陀羅尼
oṃ namastreya dhvikanam /sarva tathāgata hṛi daya garbhe jvala jvala / dharma dhātu garbhe / sambhara mama ah yu samśodhaya mama sarva pāpam / sarva tathāgata samaśotośinśa vimale viśuddhe / hūṃ hūṃ hūṃ /aṃ baṃ saṃ jah svahā

〈５〉パドマウシュニーシャ陀羅尼
oṃ padmo uṣṇīṣa vimale hūṃ phaṭ

これらの陀羅尼を21回、唱えた後、曼荼羅の本尊・諸尊の真言をできるかぎり唱える。そのようにして加持した土砂などを遺体などの依代に散じながら、「故人の罪と障碍すべてがなくなるように」と真言を唱える。

阿闍梨は胡麻粒を左右に投げ、消除し、火に投げ入れる。十五種類の真言を唱える。

故人の罪、障碍、悪趣の因である業のすべてが浄化され、将来、速やかに悟りの境地に導かれるようにと祈願する。これらの真言を唱えながら、智慧の真言鬘が光とともに依代に溶け込み、故人が無始以来積んだ悪業罪障一切が浄化され、遺体は透明な光明の自性となったと観想する。

一般に、罪障を浄化し、悪趣の門を閉ざす手段として、世尊は一切衆生のために加持力のある多くの陀羅尼や真言を説かれた。そのため、故人も私たちもそのことを知り、信心をおこし、恭敬することが重要であると『一切悪趣清浄タントラ』に説かれている。

❸本行の第三、沐浴による罪障浄化について

チベット密教の儀式では、沐浴の儀礼によって霊的な害や環境の浄化が行われることが多い。この死者浄化儀礼においても、閼伽水によって死者の罪障や業障を浄化し、洗い清める沐浴の儀礼を行う。釈尊がお生まれになったとき、天人や龍たちが閼伽水を降らせて産湯としたことから、この伝統ができたと言われる。

沐浴の儀礼には、１）曼荼羅などの依処を対象とする、２）故人の名前などの浄化の依代を対象とする、３）毒（煩悩）を取り除く、という３つがある[19]。

１）曼荼羅などの依処を対象とする沐浴儀礼について

曼荼羅を安置しているならば、曼荼羅の前で、鏡に曼荼羅の映像を映して、その鏡を沐浴の羯磨瓶の閼伽水によって浄める。曼荼羅がない場合は、仏の身口意の依処などを観想し、それらの依処を鏡に映して、同じように閼伽水によって浄め、おからだを洗う。

おからだを洗うときには、BCLKhによれば、以下のように唱える。「かつて釈尊がお生まれになった刹那に、諸々の天人が天の清らかな水によって沐浴をささげ、おからだを洗ったように、私が［仏の］おからだを洗い清める。oṃ sarva tathāgataya abiṣekata samaya śriye āḥ huṃ、仏のおからだには煩悩はないが、故人の身の罪障を浄化するために、仏のおからだに沐浴を捧げ、故人の身の罪障を浄化するのである。」[20]身の代わりに、口・意を入れて唱えて、それらの罪障も同様の方法で浄化する。

その後に、おからだを拭き、衣服を差し上げ、装身具で飾る。

２）浄化の依代を対象とする沐浴儀礼について

曼荼羅や仏本尊の沐浴儀礼に用いた閼伽水を再び沐浴の羯磨瓶に注ぎ戻し、その閼伽水を遺体に散じて、洗い、浄化する。

あるいは、故人の名前を依代とする名前の浄化（ming byang）を行う。

右手にクシャ草を持ち、その瓶水を故人の名前が書かれた紙に散じて、洗い、浄化する。

依代を浄化するときには、BCLKhによれば、以下のように唱える。

「これは布施の自性の水であり、

貪欲の垢を浄化するために、

布施の香りによって芳香をつけた水で沐浴なさったように、

ここで沐浴を施し、お払いを行う。

諸尊の御胸から放たれたマーマキーや仏眼母などによって、白い甘露が満ちた瓶を手にして、金剛鈴を鳴らし、経文と真言を唱えながら、沐浴を施す。故人の全身に甘露が満ちあふれ、罪障全般と、特に貪欲の垢を薫習とともに浄化し、身体は透明な光明の自性になった。」と観想する[21]。

続いて、戒、忍辱など六波羅蜜にあわせて、六波羅蜜に反する垢を順に沐浴儀礼によって浄化する。

以上のような六波羅蜜に対応した沐浴儀礼の方法は、アティーシャが阿閦如来（不動如来、mi khrugs pa）の死者浄化儀礼として説かれている通りである。また、沐浴による浄化儀礼は『九仏頂タントラ』にも明確に説かれており、「三界の垢を浄化すべし」と唱えながら、遺灰あるいは衣服を金剛の水によって浄化する。

３）毒（煩悩）を取り除く浄化儀礼について

阿闍梨は金剛鈴を鳴らしながら、故人の身体を瓶水によって洗い清め、三毒の煩悩とそれによって生じた悪業と罪障すべてが身体から外に流れ出て、四大種のうちの地大に溶け込んだ、と観想する。

「貪瞋痴３つは世俗の三毒であり、世尊仏陀には毒はなく、世尊の威光によって毒を消除する。地大は毒の母であり、地大は毒の父でもある。真実のことばによって、故人の毒は完全に消除した。毒は地に入れ。満たされた器に毒が入るように。」と唱えて、観想する[22]。

水大・火大・風大についても同様に唱え、観想して、心の煩悩として

の毒を取り除く。

一般にすべての罪障は煩悩という因から生じたものである。しかし、身体の四大種もまた一時的な縁（きっかけ）となっている。そのため、四大種は罪障の父母だと言われる。「そこに入れ」とは、因と縁がそれぞれの究極的なあり方である如実に溶け込み、浄化されることが説明されている。

❹本行の第四、灌頂による罪障浄化について

死者に灌頂を授けるべきか否かについては、仏教世界においてさまざまな意見や見方がある。灌頂は密教の実践許可を授ける重要な儀礼であるという理由から、生前に灌頂を受けたことのない故人に死後灌頂を授けることは適当でないという考え方もあり、是非について議論がある。

しかし、古代インド密教では、多くの経典において灌頂授与の重要性が説かれている。

ここでは、故人が生前に灌頂を受けたことがあるならば、死者浄化儀礼において灌頂を授けてよいが、生前に受けていないならば、灌頂を授けず、罪障浄化と福徳資糧積集のために曼荼羅に入壇させ、本尊と眷属諸尊に出合わせるだけにすべきだ、と伝統として伝えられている。

『時輪タントラ』根本タントラには、「砂曼荼羅を描き、死者に対して生前と同様に灌頂を授けるならば、悪趣に再生していても即座に解放されることは疑いない」と説かれている[23]。また、『金剛帳タントラ』にも同じ表現で同様の内容が説かれている。

『悪趣清浄タントラ』には次のように示されている。「諸天が「世尊よ、罪を積んだせいで諸々の衆生は地獄に落ちている。彼らの地獄の苦をなくすためにどうすべきか」と尋ねたところ、世尊はこう答えられた。「自在天よ、聞きなさい。地獄に落ちた衆生たちにどれほどの大罪があろうとも、彼らを地獄の苦から容易に解放できる方法がある。そのように曼荼羅を描き、生前と同様に百八の真言を唱え、灌頂を授けるならば、それにより一切の罪障が浄化され、地獄などの苦から彼らは解放される。」」[24]

『清浄タントラ』にも、「そのように曼荼羅に入壇させ、灌頂を授けるならば、一切の悪趣から解放され、天上界やより上位の天界に再生する」と説かれている[25]。

このように多くの経典・タントラにおいて、死後の灌頂授与が説かれている。

また、「世尊が「天子らよ、それらの衆生を曼荼羅に入壇させ、灌頂を授け、法を授けなさい。そうすれば彼らは長寿を得る」と説かれた」とも記されている[26]。

「生前に灌頂を受けていた故人に対して、阿闍梨が故人のために、慈悲をもって静謐な場所で曼荼羅を成就し、供養し、強い信解（観想）によって故人を招き入れ、瓶灌頂などによって灌頂を授けるならば大きな利益と強力な功徳が得られる」とも説かれている[27]。

一方で、生前に灌頂を受けていない故人への灌頂授与や、生前に灌頂を受けていても死者に対する死後の灌頂授与は、灌頂を秘する三昧耶に反するという観点から、死者への灌頂授与を厳禁とする教えも見られる。なお、現代の真言密教では、死者に灌頂を授け、仏縁を結び、密厳浄土に導くことが実践されていることが桜井博士の論文に見られる[28]。

現代のチベット仏教の実践の伝統では、「灌頂授与や曼荼羅入壇をおこなわない場合は、供養を加持し、それらを故人によって曼荼羅の本尊に供養させるにとどめるべきだ」という、ラマ方のおことばが伝えられている。

❺本行の第五、転移（gnas spor ba）による罪障浄化について

転移による罪障浄化とは、居場所を変えさせるという意味であり、具体的には悪趣から浄土などへ導くことである。極楽浄土などの仏国土や、悟りへの道に導くための指示であり、重要な儀礼である。

この儀礼の次第には１）極楽浄土の様子を説く、２）極楽浄土に生まれる原因とそこに行くための道を示す、３）極楽浄土への道を浄化して転移させる、という３つがある。

1）極楽浄土の様子を説く

故人に次のように呼びかける。

「この世界の西方にある極楽浄土。そこは、生まれた瞬間に苦はひとつもなく、円満なる楽ばかりの清らかな世界。そこには無量光如来と眷属たちが菩薩と無漏なる声聞縁覚などともにいらっしゃる。あなたはそこに行きたいという思いを起こしなさい。」(29)

2）極楽浄土に生まれる原因とそこに行くための道を示す

KRBCによれば、以下の内容を観想する。

「至宝の宝珠の聖なる仏国土とは、あなたのために阿闍梨が成就された本尊の曼荼羅である。至宝の宝珠から生じたとは、曼荼羅と諸尊に供養と称賛をしたことから生じたのである。至宝の宝珠の光明とは、本尊と諸尊の加持力と威力の結果である。至宝の宝珠の鬘は清浄であるとは、加持力と威力によって死者であるあなたの心相続が完全に清らかになった。このような悪趣浄化の儀軌の加持力の因は、資糧を成就する資糧道である。依代を生起する南門の儀軌は加行道である。曼荼羅に入壇し、本尊と眷属諸尊を見たこと、あるいは極楽浄土を見たことが見道である。見たことを心で修習することが修道である。極楽浄土に転移することは特別な道であり、善趣の道である。蘊・処・界の不浄なる顕現すべてと、悪業と罪障を薫習とともに智慧の炎によって焼き尽くし、三仏身と五仏智を伴ったことは菩提の無間道であり、至福の道である。悪趣から解放した道に依って、将来悟りの境地を得るようにと願いなさい。」(30)

ここでは、顕教に説かれている五道と密教の実践を一体化した実践法を示している。

そして、KRBCによれば、上記の内容の偈頌を故人に唱えさせると観想し、阿闍梨自身も唱える。

「至宝の宝珠の聖なる仏国土において、至宝の宝珠から生じた、
至宝の宝珠の光明によって、宝珠の鬘は清浄である。
資糧道と加行道、見道と修道、

無上なる特別な道、菩提の無間道、
証得解脱の道に依って、一切の罪を浄化して、
この聖者の道を進めますように」[31]

この偈頌を唱えさせる目的は、故人に極楽浄土に生まれたいという強い願いを起こさせるためである。

3）極楽浄土への道を浄化して転移させる

KRBCには次のようにある。

「蓮華が泥によって汚されることがないように、
三有（三世間）は垢によって汚されることはなく、
有の蓮華から生じ、
極楽浄土に生まれますように」[32]

との偈頌の通りに故人が願い、真言を唱えながら、宝の花を無量光如来と眷属諸尊に供養した、と観想する。

浄土への転移の実際の行は、KRBCによれば、以下の通りである。

再度、供養の灯明を灯し、阿闍梨が故人の代わりに救世者無量光如来に強く祈願する。その祈願によって、「無量光如来の御胸から光の鉤が放たれ、光の鉤は死者の頭頂から入る。故人の胸にある意識が本尊に祈願することによって頭頂から飛び出し、妨げなく極楽浄土に到着し、無量光如来の御前の蓮華に化生した」と強く信解（観想）する[33]。

阿闍梨は右手で金剛杵を持ち、左手でクシャ草を持ち、依代の胸に指し触れる。あるいは、右手で金剛杵を持ち、左手で弾指し、浄土へ導いた、と観想する方法もある。いずれにしても、転移を修する阿闍梨には非常に明確な観想と堅固な信心、強い禅定の力があることが理想である。

そのとき、「故人は天人の姿でさまざまな荘厳に飾られ、陀羅尼・勇気・神通力などの無数なる功徳を伴って、極楽浄土に化生した」と観想する。

また、KRBCによれば、次のように観想する。

「極楽浄土に生まれた刹那に故人は菩薩となった。他の菩薩たちから

argamなどによって供養される。この菩薩は無量光如来にお目にかかり、御顔を拝して、大いなる敬意を表し、供養を捧げる。無量光如来がこの菩薩のために説法なさる。」

これについては、ツォンカパが「梵天・帝釈天などの世間の神々が、彼（女）が極楽往生し、無量光如来からお言葉をかけられたことに驚嘆し、それは死者浄化儀礼の行を行った功徳によると知って、帝釈天が供養し、次の偈頌で称讃した」と述べている。

「仏と等しい教主はない（sangs rgyas ‘dra bai ston pa med）。
法と等しい善はない（chos dang ‘dra bai dge pa med）。
僧伽と等しい器はない（dge ‘dun ‘dra bai snod med de）。
真言密教と等しい導きはない（sgnags dang ‘dra bai ‘dren pa med）。」(34)

故人自身も極楽浄土に生まれた因について考察し、死者浄化儀礼の力によると知ると即座に死者浄化儀礼の場を訪れ、

「エマ、救世者釈迦仏の事業は稀有な驚くべきもの。
悪趣に落ちた有情は稲妻のように速やかに解放される。
如来の法は不思議であり、
真言密教の諸々の功徳は不思議であり、
菩提に依る者らも不思議であり、
梵行の無垢なる戒律は不思議である。」(35)

などと称賛し、曼荼羅の本尊と眷属諸尊に供養し、菩薩となった故人はこれから大乘仏教の菩提道を実践できるようになった」と観想する。

3）－2　罪障浄化のために依代を燃やす

KRBCによれば、以下の偈頌を唱えながら、依代を燃やし、罪障を浄化する。

「善男子よ、聞きなさい。
五蘊の薪で五仏部の火をつける。
四大の薪で四仏母の火をつける。
六根の薪で菩薩の火をつける。

六境の薪で六明妃の火をつける。
身口意３つの薪で三仏身の火をつける。
三仏身、五仏智を具して、利他行を成就できますように。」[36]
このような美しい比喩と韻律の偈頌を唱え、偈頌の深い意味を観想しながら、阿闍梨は行を終えていく。
以上が、浄土へ導き、転移させる浄化儀礼である。

結行について

これらの行法の終わりに、阿闍梨は再び供養し、尊格を発遣し、供養などを堂外に運び出し、捨て置く。伝統的には、御礼（gtang rag）として、南門の儀式を行った後に金剛ダーキニーの護摩供養を21回行うのが一般的である。
そして、阿闍梨は、最後に廻向と祈願をして、行法を終える。

チベットにはツァツァと呼ばれる塼仏（せんぶつ）を作る習慣がある。故人の追善のために、火葬後に残った遺灰を混ぜた粘土でツァツァを作る。また、仏塔を建立し、仏像やタンカ（仏画）を作ることも多い。これらもまた資糧積集と罪障浄化の修行であり、故人のために非常に重要だと伝統的に考えられている。
これらの密教的実践儀礼法は、前述の通り、釈尊ご自身の時代に残された経典に基づいたものである。転移、供養、真言念誦などは『悪趣清浄タントラ』序品にはっきりと説かれている。釈尊は御母摩耶夫人のために三十三天（忉利天）に赴かれ、そこでこのタントラなどを説かれた。このタントラは、無垢なる光の天人たちは死が近づくと、死後地獄に落ちることを知り、非常に怖れるので、彼らのために説かれたことはよく知られている。梵天と帝釈天はこの教えに驚嘆し、前述の「仏と等しい教主はない」[37]という偈頌で釈尊を称賛したと言う。

まとめ

冒頭でも述べたように、仏教は生者だけの教えではなく、死者のための教えでもあり、死者のための実践を行う伝統や習慣がチベットには今もしっかりと根付いている。

さまざまな儀礼法を行うことは、人々が生と死の両方を等しく大切にする伝統である。誰かが亡くなったときに、残された人たち、家族、友人、師弟、仕事などの関係のある者が、故人のために、良心と愛情により、他界への旅と転生について精一杯考えて、このような行法を行っている現実がある。人生を共にした人が二度と会えない他界に去っていくときに、残された者に何ができるかは人類共通の課題である。

そして、我々の仏教の世界では、このような密教の多くの儀礼や祈願などの実践法という手段によって故人の意識が次の善い世界に向かうように見送る。これは大切な体験であり、重要な出来事である。残された者が悔いなく、できるだけのことをしたという気持ちを持つことにつながる。

以上の儀礼などの実践は、故人の意識が安らかに不安や混乱なく旅立つために、残された者が精一杯さまざまな手段を通じて故人を見送る聖なる行法なのである。

参考文献

『一切悪趣清浄儀軌』: *De bshin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su ba gzi brjid kyi rgyal po'i brtag pa;* Toh.No. 483.

『九仏頂タントラ』: *De bshin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su ba gzi brjid kyi rgyal po'i brtag pa phyogs gcig pa zhes bya ba*; Toh.No. 485.

Chisan Kangaku-kai:『葬送儀礼と現代社会』、青史出版、2017.

Nakashima K:『一切悪趣清浄儀軌』の研究―Buddhaguhyaの注釈を中心に、起心書房、

2012.

Tsong Kha pa（1）: *dPal rnam par snang mdzad kyi sgo nas nan songs thams cad yongs su sbyong ba'i dkyil 'khor gyi cho ga Don gsal ba zhes bya ba;*（Tha）, Toh.5385.

Tsong Kha pa（2）:*Nan song sbyong ba'i rgyud rJe'i gsung gi mchan dang bcas pa:*（Na）Toh.5334.

bLo bzang tshul khrims: *Bcom ldan 'das Kun rig gi sgo nas sbyong chog bya tshul – sdig sgrib rnam sbyong zhes bya ba*; Chahar Blo bzang tshul khrims, bLobzang dgongs rgyan（=LZGG）Series,No.31,Drepung Loseling Educational Society, Mundgod, 1998.（=KRBC）

dBal mang: *gShin po'i sbyangs chog dangs shel me long zhes bya ba*; dbal mang dkon mchog rgyal mtshan, LZGG Series, No.31, Drepung Loseling Educational Society, Mundgod, 1998, Pp.139-148.（=ShBC）

Tanemura G（2004）:「インド密教の葬儀―Śūnyasamādhivajra作Mṛtasugatiniyojanaについて」-『死生学研究』、秋号、pp.26-47

Sakurai M（2005）:『ドゥルガティパリショーダナ・タントラ』死者の救済と後生安楽を目指して（桜井宗信）『インド後期密教』、上、春秋社.

Sakurai M（2007）: インド後期密教における葬儀と追善、『現代密教』、第19号、智山伝法院.

Sakurai M（2008）: Jñanapāda流の伝える死者蘇生儀礼―Vitapatadaの所説を中心に―、『現代密教』、第20号、智山伝法院.

Skorupski T: *The SarvaDurgatipariśodhana tantra*- Elimination of all evil destinies; Motilal Banarsidass, Delhi, 1983.

Yong'dzin（1）: *sByang chog gi lag len dang khungs gsal bar bkod pa rgyud don gsal ba'i rgyan zhes bya ba*; Ye shes rgyal mtshan, Toh.6120, Blo bzang dgongs rgyan series No. 31,Mundgod, 1988.（=BCLKh）

Yong'dzin（2）: *dPal rdo rje 'jigs byed kyi sgo nas sbyang chog bay ba'i tshul;* Yeshes rgyal mtshan,Toh.6039; LZGG Series No.31, Mungod, 1988.

註

（1）Cf. Sakurai M.（2005）; Pp. 130-160.

（2）Cf.; Yongs 'dzin（1）; Pp. 34-35.

（3）Full title of the text*: Bcom ldan 'das Kun rig gi sgo nas sbyong chog bya tshul –sdig sgrib rnam sbyong zhes bya ba*; Chahar Blo bzang tshul khrims;LZGGSeries;No.31, Pp200-236.DrepungLoseling Educational Society, Mundgod, 1998.

（4）bLo bzang tshul khrims; P.201; Yongs 'dzin（1）; P.5.

（５）ibdi;, Pp.202−203.

（６）“rJe btsun rtsa ba dang brgyud par bcas pa’I dpal ldan blama ma dam pa rnams kyi bka’ bden pa dang sangs rgyas kyi bden pa dang chos kyi bden pa dang dge ‘dun gyi bden pa dang de bzhin gshegs pa dang rdo rje dang Padma dang gsang ngag dang rigs ngags kyi lha’I khyad par thams cad dang……”: ibidi;, Pp.204−205;

（７）Cf.; Yongs ‘dzin（1）; Pp.13−15.

（８）Ibdi;, Pp.13−14.

（９）Ibdi;, P.15−16.

（10）BLo bzang tshul khrims;“gnas nyer gnyis ni/ *spyi gtsug, dral ba, mzod spu, mig gnyis, rna ba gnyis, sna dang sna yi rtse mo, kha, snying kha, lkog ma, dpung ba, rked pa, gsang ba/ pus mo gnyis, rkang bol gnyis, long bu gnyis te”*//; P.209; Tsong Khapa（2）; p.605.

（11）ibdi;, P。10.

（12）“Hum *chos nyid stong pa gnyis med ngang nyid las/ ‘jig rten spyod pa’i tshul yang mi spong nyid/ thabs la mkhas pas ‘jigs byed skur ston pa/ khro chen ‘bar ba’i tshogs la phyag tshal lo//* ;ibdi; P.210.

（13）ibdi;, p.211−12

（14）ibdi;, Pp.212.

（15）ibdi;, Pp.212−213.

（16）ibdi;, Pp.214−215.

（17）ibdi;, P.215.

（18）dBal mang; P.131. bLo bzang tshul khrims, P.217.

（19）1）rten la khrus gsol ba/ 2）sbyang rten la khrus byed pa/ 3）dug dbyung ba dang gsum//, blo bzang tshul khrims; P.218.

（20）“*Ji ltar bstams pa tsam gyi ni/ lha rnams kyis ni khrus gsol ltar/lha yi chu ni dag pa yis/ de bzhin bdag gis sku khrus gsol*”; ibdi; P.218.

（21）*“’di ni sbyin pa’i rang bzhin chu/ ser sna’i dri ma sbyong mdzad cing/ gtong ba dri yis legs bsgos chu/ khrus legs mdzad kyis khrus bya’o//;* ibdi; P.220.

（22）ibdi;, P.221

（23）Yongs ‘dzin（1）; p.34.

（24）Tsong Khapa（2）; P.602−603.

（25）Yongs ‘dzin（1）; P.35.

（26）ibdi;, P.36.

（27）Sakurai M.（2007）; P.136.

（28）Yongs ‘dzin ye shes rgyal mtshan が以下の目次を立て説明されている。

(1)bDe chan gyi zhing gi dgod pa dang/ (2)der bgrod pa'i lam rnams bstan pa/ (3) lam sbyangs nas gnas spor ba/; Yongs 'dzin(2); P.37.

(29) bLo bzang tshul khrims; P.229. また Yongs 'dzin(1); P.37.

(30) Yongs 'dzin(1); Pp.38-39.

(31) "*dKon mchog rin chen dpal zhing du/ dkon mchog rin chen las byung ba/ dkon mchog rin chen 'od zer gyis/ rin chen phreng ba rnam dag pa ……..*" bLo bzang tshul khrims, P.230.
この内容に関して桜井博士の論文も参照すること。SakuraiM.(2007); P.141.

(32) *"Pad ma 'dam gyis ma gos ltar/ srid gsum dri mas ma gos pa'i/ srid pa'I pad mo las byung ba/ bde ba chan du skye bar shog*"//, ibdi;, p.230.

(33) ibdi;, P.231. Yongs 'dzin(1); Pp.40-41.

(34) ibdi; P.232.

(35) bLo bzang tshul khrims; P.232.

(36) ibdi;, P.233. Yongs 'dzin(1), P.43.

(37) Sakurai M(2005); Pp.136-137. Yongs 'dzin(1); Pp.42-43.

キーワード；浄化儀礼、浄土への道、中有（bardo）,チベット密教の儀礼